
・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

【Nコード】

N2135M

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る

【あらすじ】

金髪ロリヤンデレっ娘と一日のデート。

すみませんただ自分の趣味詰め込んで暴走しただけです。

プロローグ（前書き）

何となく作ってみた。

読まない方が良くかもしれません。

一応これ、後付ですから。

真相忘れないためのメモ的なものですがね。

ラストに読んだ方が・・・

その前にラスト作んなきゃ。

ブローグ

くらいよ

いたいよ

おかあさん

ごめんね

わるいこでごめんね

さむいよ

おなかすいたよ

なんで？

おかあさん

わたしのためなのに

おかあさんわらってる

しかたないよね

わたしわるいこだもん

そうだよね

すみっこでじっとしていねばなんにもされないよね？

だから

だから

いいよね？

ひとをすきになっても

ここからみえるあのこ

すきっていつぐらいいいよね？

違うよね？

わたしが好きっていったからあのこが殺されたの？

わたしは悪魔じゃないよね？

ち、ちがうもん！

ご、ごめんなさい

もう好きって言わないから

ただいま

あれ？

どうしたのお母さん？

え？

ガス臭いのは何？

え？なに言ってるの？

え？それって・・・

ちょっと待って！

え？何が悪かったの？

私がまた人を好きになっただから？

ごめんなさい、だから・・・だから・・・

ここにいるのはニュースレポーター！。

後ろには凄い燃えさかるアパート

「見て下さい！ この燃えさかるアパートを！ なぜこのようなことが起こったのか、現在警察が捜査中です」

テレビの前ではごろ寝をしながら見ている少年1人。

「・・・」

結局、少年は真相を知ったのかどうかはわからない。ただテレビを眺めていたことしかわからない。

プロローグ（後書き）

・・・一応これメモですから！

読まない方が良いかもしれません。

かなり適当な希ガス。

核心にはあんまり触れないようにしたのですが・・・

一話目（前書き）

・ ・ ・ 趣味詰め込んで暴走したただけなんで、大目に見てください。
かなり、普通 ・ ・ ・ ? にしたつもりです。

一話目

・・・なんだ？この状況。

俺はふつーの中三男子で少子化に貢献する一人っ子。

そしてお袋と親父は旅行に行つてて

「俺ん家、今日誰もいないんだ」

状態。幼なじみもいればフラグの立てようもあるが、

幼なじみはおるか友達すら居ない。

たまたま居ないだけ。

かなりの番長、とか、女子とは全く関わらない、とかじゃなくて。

普通に運が悪かっただけ。だと思う。

それ以外に理由はないから。

その女子に全く縁の無かった俺が、

どうして、金髪ロリッ娘にヤンデレ行為されなきゃならんのだ。

・・・朝起きたら、手錠掛けられて抱き枕化つて。

俺のいろいろが危ないんですが。

無防備な体、さらっさらの金髪、あと匂いが俺の理性を・・・

うん、手錠さえなければ確実に道はずしていたであろう。

でも、手錠は氣にくわない。一部の紳士変態さんには受けるであろうが。

「おい、起きろ。この手錠はずせ。」

「ううーん、むにやむにや・・・」

かわいい。でも俺のせつかくの休日を全部チャラにされてたまるか。

「おーきーろー！！！！」

「ひゃうっ！」

とてつもない罪悪感が胸の中に広がる。

「お・・・おにいちゃん・・・ひどいようっ・・・うっっっ・・・」

「

何かこれ、こいつのファンに殺されそうな・・・

変態さん

「あ、ごめん。」

なんで俺があやまらなきゃならんのだ。

でも、こんな顔を見せられたら謝らざるを得ないだろう。

「うつうつ・・・いいよ。だっておにいちゃんだもん。ひぐっ」

だからその罪悪感の残る謝り方をやめてくれ。精神崩壊しそうだから。

「あ・・・じゃあこの手錠をはずしてくれ。」

「それはいや」

全否定。ツンツンしてるな

「いや・・・そこを何とか」

朝から幼女に頼み事。情けないにも程がある。

「え・・・。じゃあわたしの『かれし』になつて、いいでしょ？

おにいちゃん」

「いいけど・・・」

「やったー」

顔いっぱい笑顔、かわいいにも程がある。

こいつの彼氏ならいいかな。

いかんいかん。ロリに堕ちるところだった。

ガチャッ

手錠がはずれた。

「んで、その『彼氏』ってのは何すればいいんだ？」

「えっとねー、その・・・」

考えてるところを見ると、思いつきで言っちゃったんだろう。

「じゃあ、でーとしよう」

「うん、いいよ。」

「じゃあ、やくそくねっ」

こうしてみると、普通のロリッ娘だな。

「やくそくやぶったら、ほうちょうで「ぐさっ」だからね」

前言撤回、こいつ、どんな教育受けて来てんだ？完全に思わしくな

い教育だろ。

一話目（後書き）

・・・一回PCがダウンして、原稿再生できなくてキレかけましたが楽しかった。それだけ。

暴走したので、中身はひどいですが・・・。

後、続く感じにしたけど、親がうるさいから一応進行状況保存しただけ。

今日更新したいけど、もしかしたら明日、ひよっとするともうしない・・・。

だから、気にしないでください。

二話目（前書き）

・・・起きた直後に暴走。

二話目

朝食を終え、色々済ませてから、靴を履く。

「おにーちゃん」

「お、どこ行くか決まったのか？」

「じゃあねー、ぷーる！」

「プール・・・あ、いや、なんでもない！」

「どうしたの？いや？いやでもしばってつれてくよ」

「あ、それはやめて」

そして外に出た。

バス停までゆつくり歩く。

もう夏か・・・日差しが暑いを通り越して痛い。

そんな中、幼女の肌は柔らかかそうで真っ白だ。

どこから取り出したのか、明らかにサイズの違う麦わら帽子をかぶって顔いっぱい笑みを浮かべる。

「たのしみだね！」

「ああ・・・そうだな」

「おにーちゃん、わらわないとしめるよ」

俺の気持ちを察したのか、そういつてくれた。

「水着・・・大丈夫なのか？」

「あるよー、これっ」

そういつて取り出したのはスク水だった。

「おいおい。」

「えー？だめ？これしかなかったの！ぷー」

怒った顔もかなり可愛かった。

「ふうん・・・」

そんな会話をしてるとバス停に着いてしまった。

「よし、乗ろうか。」

俺はあのとと同じセリフを発した。

「うん！」

バスの中は、微妙な時間とあってかほとんど無人状態であった。丁度、隣り合ったふたつの席が空いていたのでそこにした。

「しずかだねー」

「そうだな」

それ以外特に話すこともなく、何となくぼーっと過ごした。

「市民プール前、到着いたしました。」

着いた。

これだと子供連れに見えるな。と思いつつ券を買い、中に入った。

「自分で着替えれるよな？」

「うん」

「じゃあ出たところで待ってるよ」

「はやくしないとどっかいつちやうよー！」

（それ、自分で言うか？その歳で。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

やっぱり。

こいつがなんなのかは判らないが、あいつとセリフや反応が同じだ。

じゃあ．．．

いや、そんなことはない。させてはいけない。

うん、大丈夫。それよりも着替えを済ませよう

着替えを済ませ、あいつと合流した。

「お、似合ってるじゃねえか」

「そう？へーんたしい」

「褒めてもらってんだから素直に受けとつとけ」

「じゃあ、ありがとー！！」

「ああ」

（大丈夫だ、こいつは素直だ）

「はいろっ！」

やはり時間が時間なのでほとんど貸し切り状態だった。

「おようこっ！」

「ああ、そこにするか？」

準備運動を済ませ、ゆっくりと入る。

一方あいつは、思いつきり飛び込みした。

「・・・ぷはあ、ねえねえみて！くろーるできるんだよー！」

「おお、えらいなー」

「もつとほめて！」

「えーと、優雅で大胆かつ繊細な泳ぎお見事です」

どうだ、俺の知ってる限りの褒め言葉だ

「わかんない」

一瞬で粉碎。

「・・・」

「でも、ありがとっ」

「どーいたしました」

冷たい返事とは裏腹に、俺の顔、赤くなっただろうな・・・。

二話目（後書き）

いかん。昨日から引き継いだんだが、どう繋げるか判らんくなった。
不自然なつながりは勘弁してください。
ついでに、

どうしてこうなった!!!

この先どうしようか・・・
方向性見失いました。orz

三話目（前書き）

遅れてすみません（>人<）
一応方向修正したつもり・・・。

三話目

プールから出た後、一応外に出た。

「こっからどこに行く？」

「ゆうえんちゅ！」

まあよくあるリクエストなのだが・・・

「混んでるけど良いのか？」

「うん！」

絶対こいつ文句言うタイプだな。

そしてバスに乗り込んだ。

ちよつと混んでくるぐらいの時間帯である。

遊園地に着く頃にはどんなに混んでるんだろう？などと考えていたら着いてしまった。

「うわゝやつぱ混んでるなゝ」

「はやくいこゝよ」

「ああ、行こうか」

すたすたすた。

あいつは顔中に笑みを浮かべたまま変わらない。
なら、と思い。

たまたま通った女の人を見るふりをしてみた。

「おとなのじょせいがすきなのか？」

・・・顔は全く変わらないが、目の色や声の調子はすっごく変わってる、怖っ。

「いやいや、そんなんじゃないって」

「ふうん」

何かリユックに手、伸ばしかけてたけどそれって・・・、ってかそんなもの持ち歩くなよ。

少しからかってみたけど、あいつと変わらない。

でもこいつは、あいつみたいに悲しげな顔はしなかった。
だからかな、俺……。

いやいやいや、絶対そんなこと無いって。と自分に言い聞かせる。
あれ？

あいつが消えてる。

少し目を離れた隙にどつかいつちまったのか？

こんな人混みの中だから見つけれるか判らないぞ……！！

「とりあえず迷子センターに……」

そこまで言って気がついた、俺、あいつの名前聞いてない。

「おーい！おーい！」

とりあえず呼んでみる。

「おーい！おーい！、おーい！おーい！……」

「おーい！」

やけに高いやまびこが聞こえる。

よし、そこか。

俺は人混みをかき分けてそこに向かった。

そこには、半泣きのあいつが居た。ちよつと可愛かった。

「ごめんな。もう大丈夫だから」

「もうっ、しんぱいしたじゃんか……」

「ごめんな」

そういつて抱きついた。

夏だから少し暑かったが、あいつの体は少しひんやりしていた。

こうしていると、あいつも1人の女の子だ。朝のことがなかったか
のように思えていた。

「もう……にどとはなれないで」

「ああ、誓ってやる」

「じゃあ、」

かちやり。

「にどとはなれないようにしてあげたよ」

今日二度目の前言撤回。あいつ、なんで朝の手錠もって来てんだ！

？置いてこさせたはずだろ！？
予想上回りすぎだから。

三話目（後書き）

・・・失敗かな？

修正点が判らないので教えてくださいm（
|
|
）m

ちなみに遅れた言い訳をすると

昨日親に禁止食らってて・・・。

中学生は辛いです。orz

勉強もこつちも頑張ります!!!

四話目（前書き）

回線ぶっ壊れて今までで一回しか繋がらなかった。
遅れてすみません。

あと、間空いたからキャラ変わってるかも・・・。

四話目

手錠付きだと、周囲の目が痛い。
だって・・・逆に見られるじゃん？
どーしても、

【少年、遊園地で幼女誘拐】
つっ―一面の見出しが頭に浮かぶんだが。

でもこいつを喜ばせなきゃ。『彼氏』だから。
それに、こいつの笑顔が見られるなら『彼氏』つてのも悪くはない
し、さ。

「ねえねえ、おなかすいた〜」
「そうだな。」

言われてみれば今は一時、お腹がすくのも当然だな。
そのとき、クレープ屋が目に入ったので、
「クレープでも食うか？」

「うん！」
また顔いっぱいに笑みを浮かべていった。

「どれにする？」

「じゃあね〜、チョコ！」

「おお、いいぞ。」

「やった〜」

・・・右手が繋がれてるから財布が出しにくいんだが。
しかも見せないように隠すのに一苦労だぞ、これ。

「どうぞ」

見えてないよな？

「わ〜い！」

ちくしょう、あいつ、左手繋ぎやがって。右手空くじゃねえか。
とは思いつつ、たまたま空いていたベンチに座り、

「どうだ？」

と聞くと

「おいし〜い」

小さな口いっぱいクレープをほおぼって、

小さな手で右手をぎゅっと握って返してくれた。

「ああ、おいしそうだな」

「ありがとねっ」

やっぱこいつの笑顔は可愛い。

「でも、いつしよにたべたかったな。」

「なんで？」

「『あ〜ん』ってしたかったな〜」

バカップルじゃあるまいし。

「俺とでいいのか？」

「きみじゃないといや！」

ちよつと照れた。

「そ、それ本気で言ってるのか？」

「どうかな〜？」

そんなことを言われても俺の頬は変わらず真っ赤だ。

「か、からかうな！」

「これのりたい〜」

こいつが指したのはメリーゴーランドだった

「話をそらすな！」

「え？ふえ、ふえ・・・」

言葉の勢いにびびって泣き顔だ。不謹慎ながらもまた可愛いと思っ
てしまった。

「ご、ごめんな」

そういつて抱きしめた。

「ぐすっ、ぐすっ、いいよ・・・。だってきみがだっこしてくれて
んだもん・・・。」

「そうか、ごめんな。」

ホントに可愛いやつだな。

四話目（後書き）

あれ？間空いたから主人公変わってるかも・・・。
テストの点数悪かったからもっと暴走したかったんだけどな
遊園地長いな。もっと行かせたいところあるんだけどね。

五話目（前書き）

やばっ。

展開どうしよう・・・？

五話目

まあ俺はメリーゴーランドの列に並んでいるわけだが、手錠がかなり邪魔だ。

隣の人にバレずともかなりやばい。

つかこんなシチュエーションあるか？無いよな！？
ってことで、乗ることになったのだが・・・

「席、どうする？」

このセリフ、シチュエーション違えばいいのに・・・。

「ここ！」

よりによって一番外側の席かよ。

「ああ、いいぞ」

一応その隣に座る。

でもさ、これって後ろからはバレバレだよな。

一応手を繋いでいるふりをする。

「こいびとどうしてみたいじゃない？ねえ？」

「まあ、一応カップルみたいなのだからな」

「きやははは！でも、こいびといじようになりたいな」

すまん、童貞には結婚以外しか・・・、それで良いのか？

「あいじんだよ」

それってダイジョブですかー！？

まあ、どちらにせよロリコン扱いを受けるのだが。

メリーゴーランドが回り始める。

ゆっくり、ゆっくりと。

また、あいつが笑ってくれないかと外側を見る。

人、人、人。

休日だからかなり混雑している。

「あれ？」

少し見えた。

あいつがこつそり人陰に隠れてるところを。
前みたいに陰からこつちを見てる見たいに。

「どーしたの？」

それは絶対じゃない光景だ。

「おいおいおい、メリーゴーランドで包丁は洒落になんないって」

「また・・・きみがほかのどこみてたから」

「やめて。頼むから」

あいつは確かに普通の女子だった。

少し悲しそうな顔でいつも居ただけだ。

俺の隣で、俺が見てるときだけいつも無理に笑っていた。

それが・・・健気にみえた。

そして同情ではなく本気で可愛いと思えた。

こいつとは別の意味で。

俺がそんなこと思ったから・・・

「ねえねえ、なにかんがえてんの？すつごくこわいかおしてるよ。」

「あ、ああ。ちよつとお腹が痛くてな」

「といれ、いく？」

丁度、回り終わったらしい。

「まだ行かなくていいよ」

ピンポンパーンポン

「もうすぐ五時、閉園の時間です」

「そろそろ帰ろっか」

「まだ！おかいものいきたい！」

すまん、いま、金欠なんだわ。

「ちがう、いっしょにきてほしいの！！！」

「お、お前大丈夫なのか？」

「えへへ」

してやったり。みたいな笑みを顔いっぱいに受けべる。

これもこれで可愛いな。

五話目（後書き）

あれ？

オチ忘れた。

やばい。

どうしよう？

がんばります。

六話目（前書き）

だんだん質落ちてるな・・・orz
ガンバります

六話目

「えゝショッピングモール前ゝ」

疲れ気味の運転手の声がバスの中に響く。

「ここだったな」

もう来たくない場所だった。

こんな場所・・・

「そう、ここ」

いつになく真剣な顔だった。

こいつにこんな顔は似合わない。

このセリフを言うのも二回目だったな。

もう大体分かってきた。あいつの考えてる事が。

だからこそ、

気付かないふりだ。

「もたもたしてるとどっか行っちゃうぞゝ！」

「ああん、もう！またてじょうつけよっか？」

あんな顔、もうあいつにさせたくなかった。こいつにもだ。

「絶対に離れないんだからね」

「よし、行こう」

ずんずん中に入っていく。

「ところでお前、どこ行くんだ？」

「こどもふくうりば」

普通にガキだな。

「ふーん」

「あ、あと、ひゃっかこーなー」

「ふーん」

「ねえ、聞いてる？」

「いやいやいや、こんなことでキレんなって

「きみがなにかんがえてるかきになるな？」

のぞき込むな、その目で。

「いやいやいや、何が欲しいかな？つて」

「じゃあしんじるね」

毎回バッグに手を伸ばすな。そろそろ銃刀法違反でパクられるぞ。

つてか百科コーナーで何買うんだろっ？

「子供服売り場つて、ここか」

さすがに、六時を回つてるとあつて子供は少なかった。

たったったったった・・・

たったったったった・・・

「ちよつとしちやくしついくけどくる？」

いつの間にそんな量の服持ってきた？

「いや、別に・・・」

つてか一応今日初めて会った女子だぞ。着替えなんか・・・

いかん、ロリコンになったかも。

「でもいきたいんでしょ？」

その目つきやめろ、そんなんじゃないから。

「そ、そんなんじゃないつて！」

「じゃあいつてくるねー」

じゃららっ、がさがさがさ

大してすることもないのでぼーっとしてる。

そういえばさ、行くところは同じでも、やることは少し違うし、反応

なんか全く違うな。

・・・行くところ、か。

最後同じとこ行くならやることはどうなるだろう？ひょっとして・・・

・

「みて！」

かなり人形みたいな服を着てきた。

「どこにあつたんだ？そんなの」

「あそこ！」

指さしたのは紳士服・・・を越えてコスプレコーナー！？そんな
あつたんだ。

「遠っ」

「にあつてる？」

すっごく似合ってる。コスプレのくせに。

「似合ってる、と思う」

「もっというて！」

「ああ、食べちゃいたいぐらい可愛い」

「・・・けだもの」

ええ？期待に応えたただだから！結構いいところいたよね？
すみません、間違えました。

「・・・でもきみならたべられてもいいかな」

何かばそぼそつときこえたが、はつきりとは聞き取れなかった。
その後、何回か着替えたが、そのたび俺は頬を染める羽目になった。
そして一番可愛かった服を持ってレジに並ぶと、

「俺が買っよ」

「金欠じゃないの？」

「一応、これぐらいなら・・・」

「ほんとに!？」

「こーゆーの着て、またデートでも何でもしような」

「うん！」

俺たちは会計を済ませ、歩き出した。

「つぎは・・・っと」

「ひゃつかこーなーはいいや」

「なんで？」

「とってもいいものかってもらっちゃったから」

とても喜んでもらえたようだ。よかった。

「そのかわりに・・・」

『おくじょう
屋上』

ハモった。もう分かっていた。

その目的は分らないが、そこに行けばはっきりするだろう。

「もう、わかつてるの？」

「全然分かんないよ。でも、前にもこういうことあったから」

屋上には何も無い。人が行けるようになってるが、本当に何にもないのだ。

そこへ行くまでに、俺は思い出していた。この前の、悲劇を。

六話目（後書き）

思い出編突入！

かといって一話ですが。

ここまで読まれた方は分かっているとありますがあと二話です。

もうそれ以上続きません！

かといっていつ更新するか分かったもんじゃありませんけど・・・。

あ、二人の名前、どうしよう？

零話目（前書き）

・・・期待しないで下さい。どうしようもなく下手ですから。
しかも何も狙わずに来て悲惨。

どうしよ？後これ入れて二つだよ！？
次回作考えなきゃ・・・

少し長くなりました。

9 / 2 名前、一貫しました。

零話目

「おっはよ！」

「ふあゝ、朝から元気だな。」

俺は黒藤謙太くろふじ けんたそしてこいつは幼なじみの春風麗はるかぜ れい。

とにかく何もかも普通な二人。唯一変なのは、麗が俺のことを愛しすぎている。ってことだ。

まあ、凛はかなり可愛い方なので嬉しいのだが・・・

「また昨日も寝なかつたの？期待しすぎてくれて嬉しいけど、君の体はわたしのものなんだからね」

もう限界突端なくらい俺を愛してくれているのだ

「頼むから町中で言うのはやめてくれ、俺が恥ずかしい。」

「私なら君と居ればどんな目で見られても嬉しいな」

「俺の迷惑は！？」

「君が恥ずかしいならやめとくけど・・・」

いつもこんな感じだ。

「んで、どこ行きたいんだ？」

今日は、一応デートの約束をしている。

と、行っても昨日、思いつきで言われたような流れだが。

「君とならどこでもいいよ」

「いや、今日はお前の好きにして良いぞ」

「じゃあね、プール！」

「うん、いいんじゃないか？」

「そう？やった」

元気な奴だな。

そろそろ夏だな・・・蝉が鳴き始めてる。

日差しが強く、かなり暑い。プールは正直ありがたかった。

麗はがさごそとカバンをあさり、真新しい麦わら帽子を取り出し、

かぶった。

「似合う？」

「ああ、可愛いぞ」

「やった」

何度聞いたか分からないセリフで毎回とても喜んでくれる。

やっぱかわいいな、こいつ。

あ、そういえば。

「水着・・・大丈夫なのか？」

俺は一応家に取りに帰った。あいつ、付いてこなかったっけ？

「これっ！」

そういつて取り出したのはスク水だった。

「・・・おいおい」

「え、だめ？」

ちよつとしょぼくれた顔で行った。こいつはどんな顔させても可愛いな。

「あ、いや、意外と似合うかもな。」

「そう？」

轉身早いな、おい。

そんな会話しているとバス停に着いてしまった。

「よし、乗ろうか。」

「うん！」

バスの中は、微妙な時間とあってか運転手以外無人の状態であった。丁度、隣り合ったふたつの席が空いていたのでそこにした。

「二人つきりだね」

「・・・運転手さんに聞こえるからやめろ」

それ以外特に話すこともなく、何となくぼーっと過ごした。

「市民プール前、到着いたしました。」

着いた。

「ふんふんふん」

なんだかよく分からない歌を鼻歌で歌いながら中に向かっていく。

「んじゃ、ここで分かれるから」

「うん・・・でも、」

「なに？」

「早く来てね」

こうしてみるとバカップルに見えなくもないな。
そう考えてると

「早くしないとどこかへ行っちゃうよ」

行くわけ無いのに。とか思いながら着替えを済ませ、あいつと合流した。

「お、似合ってるじゃねえか」

「う、うん。」

何か寂しそうだ。

「どうしたんだ？」

「なんでもないよ。それよりも、泳ごう！」

準備運動を済ませ、麗が真っ先に泳いだ。
ばちゃばちゃばちゃ

「・・・ぶはあ、どう？結構練習したんだよ？」

とてもうまいとは言えないが、体育で一番下の評価をとっている麗
にとってはうまかった。

「かなり頑張ったんだな。はい、ご褒美」

といって後ろから抱きついて頬ほほにキスをやった。

「え？あ、ああああ・・・」

こいつヤンデレこんなのだけで結構純粋ガキな奴なのだ。

まあ気配りもちゃんと出来て、それなりには大人なんだろうが。

「ありがと」

ちよつとからかってやっただけだが、顔が赤い。

人の少ない時間帯だから出来ることだ。

「ははは。」

もしかして、俺も顔赤くなってる？

「こっからどこ行く？」

俺たちはプールから出た後、バスに乗り込んだ。

「じゃあね、遊園地」

「よし、ちょうど次の停留所だな。」

そういつて、バスのボタンを押した。

「うわゝやつぱ混んでるな」

「まあいいじゃん」

「ああ、行こう」

すたすたすた。

あいつはいつの間にか笑っている。

なら、と思い。

たまたま通った女の人を見るふりしてみた。

「君がそんな人がタイプだとは・・・」

・・・顔は全く変わらないが、目の色や声の調子はすっかり変わってる、怖っ。

「いやいや、そんなんじゃないって」

「ふうん」

何かリュックに手、伸ばしかけてたけどそれって・・・、ってかそんなもの持ち歩くなよ。

「どこ行く？」

「じゃあね・・・メリーゴーランド」

「おう、いいぞ」

ふと、プールのときの暗い表情が気になり、そちらを見た。少しくらい顔。

「おい、どうしたんだ？」

「あつ、いやっ、ううん。何でもない」

「んじゃ、いいや」

あいつが隠したいことなら気にしないでおう。

案外メリーゴーランドは混んでいた。

なので仕方なく麗の右前に座る形になった。

メリーゴーランドが回り始める。
ぐる、ぐる。

あいつの顔を見ようと後ろ側を見る。
少し思い詰めたような顔……。
やっぱなにか引つかかる。

ゆるゆるゆるゆる。

どどん遅くなって、止まった。

「さっき……」

「あ！お腹すいたな、私」

何か話そらされた。

「じゃあクレープでも食うか」

「うん！」

そういつて、あいつはとても強く手を握りしめた。

クレープを買うときも、受け取るときもあいつは手を離そうとしなかった。

なんかあったか？まあ、あいつのことだから大丈夫だろう。

「はい、あ〜ん」

俺は右手がふさがっていて、こうしてあいつに食べさせてもらう羽目になった。

「あ〜ん、うぐつ。―ふふえふおふいふふいふふえふおふいふふい

（詰め込みすぎ詰め込みすぎ）」

「あ、ごめん」

「かよ……」

ちよつと元気吸い取られてる気が……

「んじゃ、今度はどこ行く？」

「最後くらい、君が決めて」

「……」

軽くトラウマなんだぞ、おい。

「じゃあショッピングモールで何か見てくか？」

「うん！」

とても嬉しそうに笑う。やっぱこいつはこんな顔が似合うよ。しばらく話していると・・・

「えゝショッピングモール前」

疲れ気味の運転手の声がバスの中に響く。

お疲れ様、運転手さん。と心の中でいいながら料金を入れ、入口に向けて歩く。

「ちょっと待って！！！」

何にもないのに呼び止められた。

「行っちゃいや。わたしの側にいて。」

「ああ、どこにも行かないよ」

「絶対だよ、ほんつとに絶対だからね」

何でこんなにムキになるんだろう？

「おう、絶対だ」

「じゃあ、いいけど・・・。」

ちよつと気になりながらも、入っていく。

「ところでお前、どこ行くだ？」

「え、えと・・・服！服見に行こっ」

ここで何かあったのか？何かおかしいぞ、こいつ。服のコーナーに着くと、

「ここで待ってて！」

あれ？離れるなって言ってなかったっけ？

たったったったった・・・

たったったったった・・・

何着か持ってきた。

「試着室、入る？」

いつの間にそんな量の服持ってきた？

「いや、一応俺ら中学生だぞ！？」

まだ早いだろ！

「じゃあ来ちゃいなよ」

「・・・」

「じゃあ着替えてくるね」

「じゃらっ、がさがさがさ」

「どう？似合う？」

「ああ、にあ・・・」

思考停止。

「何でそんな服着てんの？」

「だって可愛かったもん」

「いいながら頬を膨らませる。」

「いや・・・だからってコスプレはないだろ」

「しかもその年で頬を膨らませるな、ぶりっ娘か」

「でもさ、似合ってると思うんだ」

「あ、ああ、確かに可愛いな」

「ふふん」

得意げな顔で言った。よし、ちょっとからかうか。

「ほんとに食べちゃいたいぐらい可愛いな」

「え、え？そそそそ、それって・・・どういう意味かな？」

「え？可愛いって事だよ」

「いや、君に食べられるんなら・・・」

残念そうに呟いていたがよく聞こえなかった。

こいつの焦った顔、可愛いな。

「あ、次、レストランでも行く？」

「ううん、ちょっと夜景が見たいな」

「いいぞ。」

そうつって向かったのは屋上。

「綺麗だね」

「ホントだな。」

「これで、もう、思い残したことはないね。」

「え？今なんて言った？」

「えへへ、もう、思い残したことはない。っていったの。」
と、笑って答える。

「水着も見てもらったし、遊園地にも行ったし、一緒に夜景も見れたし。もうやり残したことはないの」

「え？余計意味が分かんないんだが・・・。」

と、いうとちよつと怒ったようなそぶりで、

「鈍感すぎるよ、どつかのラブコメの主人公じゃあるまいし。」

「ま、まさかお前・・・」

「そうだよ。」

「引っ越しか？」

「・・・ちよつと違うね、こんな雰囲気壊すのいやだから言っけど、

「なんだ？」

「私、死のうと思うんだけど」

「・・・嘘だろ。」

たったったった。

「ほんとだよ！ここから飛び降りようとしてるんだよ！」

大声で言った。

「なんで？お前は死にたいなんて事はないだろ！」

そういう奴だ。こいつは。

「嘘つき・・・私のこと、全然知らないくせに。」

さつきとはうってかわって弱々しい声で言った。

「知ってる、俺が出来ることは全部。」

「嘘だよ・・・私、ずっとずっと気付いてくれるの待ってたよ」

「何が？」

そして、麗は言った。

「きみと・・・」

俺はそれに続く言葉を待っていた。

「君と離れたくないの！一瞬でも！..」

大声で叫んだ。それもさつきよりも。

「じゃあ・・・余計死にたくないんじゃないのか？」

「じゃあ！ 君はいつでも一緒にいてくれる？私を寂しがらせないようにしてくれる？私のためにいつでもそばにいてくれる？どこにも行かないで私の視界の中にいてくれる？私が追いつくために足を止めて待つてってくれる？私の気まぐれに振り回されてくれる？私以外の女の人を愛さないでいてくれる？私以外の人を側に寄せ付けないでくれる？私以外の女の人を見ないでくれる？」

「ああ。全部、そのヤンデレを俺は受け入れる覚悟がある」

「そんなじゃない！」

「違う！ とだっ子のような声で言った。

「何が違うんだ？俺は・・・」

「君にそんな迷惑掛けられない。」

「ぜ、全然迷惑じゃないよ」

「それも嘘、本当は迷惑なはず、知ってるもん。」

「・・・」

「迷惑なんかじゃない、と大声で言いたかった。

でも、でも・・・

「じゃね。」

「待つてくれ！」

「何？一言だけ聞いてあげる」

「お前が大好きだ！」

「そういうとあいつはこう言った

「ふふ・・・そんなもんかあ・・・」

「といって悲しげな表情をした。

「あゝあ、じゃね。」

そして・・・

零話目（後書き）

もう、これないかもしれませんが、来れば更新しようと思います。
すみません。

一応、後一話ありますが・・・、
出来ないかもしれません。

7 / 17

少し更新しました！

翌日に帰ってきてやりましたよ！！！！

ほんっとお父様怖ス・・・。

7 / 19 ここで終わりです！

・・・はい、長い上になんかひどいです。

しかも最後の主人公テンプレ以下・・・しかもバッドエンド選択。
最悪だ・・・。

あ、凜さんは別に、生きてる！みたいな展開に使うんじゃないで、
死んだ的なことを書きたくなかっただけです。

書きたくないんですよ！愛着わいちゃって・・・。

七話目（前書き）

遅れてすみません

よし！俺、完結する！

・・・勘違いされるな、こんなの。

やっと完結だ〜。

・・・シリアスなところでひらがな表記だとさめるな
少し長くなりました。

しかもキャラ変わりました。

七話目

「ここに来て何がしたいんだ？」

「・・・」

さつきから急に黙り込んでいる。そして、

「じゃあね。」

と悲しそうに言うのと急に走り出した。

「おい！ ちょっと待て」

あわてて走り出すが間に合いそうもない。

ダンッ

あいつの体が宙に浮いた・・・。

「おい！！！！」

俺は身を乗り出した。そして、手をのばした。

届け、早く届け。落ちるな、俺に話してからにしてくれ。

あのとき何があったのか俺にはまだ分からない。

あいつが何を悩んでいたのか、永遠に知らないなんて悲しすぎる。

何かロープでもないか、これでも使えるか？

もう何でもいい、やけくそだ！

がちゃん。

気の抜けた音が聞こえ、あいつの手首に手錠が、もう片方にはロープが掛けられている。

「よっこいしょっつと」

なんて言いながら、引き上げる。

「よかったな、手錠が役に立ったぞ。」

あえて空気の読まない発言をする。こんな空気はあいつには辛いだろう。

「なんで・・・なんでしなせてくれなかったの!？」

「いや・・・姉妹で俺の目の前で死なれたら色々あるし・・・。」

「なんでしまいってわかったの？」

「いや、あのときのデートコース話したの家族だけだし、持ってた物も近かったし」

「え、でもそれじゃあきみは・・・」

「でも、その反応が一番のヒントかな。」

・・・

沈黙がかなり流れる。

それを破ったのは俺だった。

「なあ、あいつのこと、全部俺に話してくれないか。」

「いいよ」

実はね、私たちのお父さん、私たちを捨ててどっか行っちゃったの。

不倫してて、お母さんと喧嘩したらそのまま帰ってこなかった。

それでね、お母さん変になっちゃって。

いつも何かあると私たちを虐めるの。ぼこぼこって。椅子で殴られたときもあったよ。

でもね、私たちを愛してるって言うの。

お母さん怒ったら殴って殴って殴られた後、いっつも私たちを抱いて謝るの。

ごめんなさい、もうこんなことしないからって。

そんなんだから、もう何が愛なのか分かんなくなっただよ。

それでね、だんだんお母さん、私たちに手加減しないようにしたの。

だから私たち、一回家出したら、すぐ捕まったの、一日で。

その時、もう私たちを離さないって言って、お母さん私たちに手錠を掛けたんだよ！？

それでお姉ちゃん、もう嫌って、家に火を付けて

「ごめんな。」

「それは・・・それはお姉ちゃんに言うてよ！ 何！？ 全部受け入れる覚悟がある？ 違う！ お姉ちゃんは自分の中の病気とお母さんの病気を否定して欲しかったんだよ！？」

「・・・ごめんな。」

「でも、一つだけ、君に感謝することがある。」

そんなことない。あいつに何にもしてやれなかったって事は自分が一番よく分かってる。

「お姉ちゃんに大好きっていったこと」

「なんでだ？」

「お姉ちゃん・・・それを一番言うて欲しかったからね」

「何でそんなのが分かるんだ？」

「まあね」

何か意味深な笑みを浮かべて、

「じゃあね」

とどこかへ去っていった・・・。

あの日から一週間。相変わらずあいつは意味が分からない。
と、言う。

確かあいつはあの火事に巻き込まれて、大やけどで未だ病院に入院中のはずだし、たとえ抜け出してきたも、跡が絶対残っているはずだ。

その上、家もないのにどこへ帰るというのだ？

ああ、全っ然分からない。

もしかして・・・幽霊？

「ふせいかゝい！」

・・・何でお前がここにいるんだ！

「何で俺の部屋の、ベッドの下にいるんだよ！」

「いや、なんかちょっとね。」

そのごまかし方、誰から教わった？

「しーかーも！一番の危険区域だし！！！」

男子の。

「あのね、私とお姉ちゃんがいつも一緒じゃないと思った？」

・・・こいつが言いたいのはつまり、いつも一緒にいたと。

ずっと俺らを見てたと。

俺のセリフ、全部聞かれていたと。

・・・。

はいはい、分かりましたよ。

「でね、でね。うちの親から逃げ出してきた。」

・・・つまりかくまえと。

「じゃあ、家で暮らすか？」

「うん！」

頑張れ、俺。

七話目（後書き）

・・・ラストの方かなり適当です。
何か別の連載が始まりそうですねw
やりたくないですけど。

ちなみに、零話目以外は30分、

零話目は三時間、

これはなんと五時間（全て合計）

大して練ってないけどちょいちょい作っているので、こんなにおっ
そくなりました。
言い訳ですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2135m/>

・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

2011年10月7日11時11分発行